

No.1 けち兵衛さんの話

けち兵衛さんはその名のとおりとでもけちでした。出すものといったら、息を出すのももったいないので出たくないのですが、出さないと苦しいので「少しずつ出そう」などと言うぐらいです。棘などが指に刺さると、「月 日トゲ一本」と家計簿につけておくというあんばいです。

桜のシーズン、世の人々が「花見だ！酒だ！」と浮かれているも、桜など見えないふりをして花見などには行きません。そのかわり、葉桜の頃に「もう誰も居ないからお金を盗られることも無いだろう」といって花見に行きました。もちろん、花どころか、もうサクランボが実っています。けち兵衛さんはそのサクランボを「うまいうまい」といって腹いっぱい食べるのでした。「これで今日はもう何も食べなくてもいいぞ、儲けたなあ」、けち兵衛さんはそうひとりごちていました。

ところが、その翌年の春になると、頭がかゆくて仕方がありません。かみさんに見てもらうと、何と頭中に桜の実生が無数に芽を出しています。桜の木はけち兵衛さんの頭の上ですくすく育て、ついにその翌年には爛漫の桜花を咲かせました。近所の人たちは「おい、今年はけち兵衛さんの頭の上でお花見だあ！」などといって、ドンチャカ騒ぎ。そのうるさいこと煩いこと。困り果てたけち兵衛さん、その桜の木を全部抜いたら、その跡に大きな池中には沢山の鯉や鮒なりました。すると、近所釣をする、泳ぎをするでもできません。ついにけち兵衛さんは、悲観してこの池に身を投げて死にました。